
素直

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直

【Nコード】

N5546N

【作者名】

潤

【あらすじ】

斎藤隆は腐れ縁の平野香奈の友達
狩野玲奈に想いを寄せる。

しかし、香奈に協力してもらっているうちに
香奈の方を好きになってしまう。
それを知った玲奈は
その恋に協力すると言い出す。

腐れ縁・高2

「お、おはよー」

後ろから元気よくあいさつされた。

「おはよ」

そう返したのは斎藤 隆である。

あいさつしたのは平野 香奈である。

この2人は…。

「なんというかお前とは

腐れ縁ってやつかいな？」

「まーまーそーいわずに

今年もよろしくね」

そう幼稚園・小学校・中学と

すべて同じクラスだった。

そして…クラス発表。

今年高1も同じだった。

高2

高校にもなれ進級した。

高2である。

高2ですら2人は同じだった。

が、隆は明らかにそんなこと忘れていた。

同じクラスに「狩野 玲奈」がいた。

そう可愛く、

運動万能、学力すら学年トップクラス。

そんな玲奈が隆は気になっていたのだ。

「あ、玲奈じゃん。

今年と同じクラスだねー」

「ちょっとー香奈ー。

気付くの遅いよー」

「えへへ、ごめんね」

いつも通り退屈そうに頼杖を付きながら

玲奈を眺めていると隆の耳には

玲奈と香奈との会話が聞えてきた。

(…なんてこったあ、あいつと狩野さんは友達かよ…)

席替え

そんな隆にチャンス到来。
クラスでの席替え。

そこでなんと席が左横になったのだ。

が、右横は香奈。

「やー隆ー」。

横だねー」

「あー横だな」

「そんなことよりさーいや。

これは後で聞くよ。

だから放課後ちよつといい？」

「なんだよ？今じゃダメなのか？」

「うん、ちよつとね」

「まー家近所だしな。

別にいいぞ」

その会話の後

いつも通り退屈そうに頬杖を付きながら
玲奈を眺めた。

その日の帰り道。

めんどくさそーに隆と

香奈が並んで帰ってる。

「んじゃ、ここでなら話せるか？」

そう言っただけいたのは隆の家だ。

相変わらず大きいマンションの1部屋。

「うん」

隆の部屋だ。

ガチャ。

「おじゃましまーす」

「そういつでも誰もいねえぞ」

「あれ？お母さんとかは？」

「あー引越したよ、別の家に」

「ふーん、じゃ、

隆一人暮らし！？」

「そうだけど…」

「私幼馴染なのに知らなかった」

隆の家

「私幼馴染なのに知らなかった」

「別に関係ねえだろ。」

で、言いたかったことってなんだ？」

「あーそうそう。」

前の席から思ってたんだけどさー。

隆って玲奈のこと好きなの？」

「んなあ？」

（やべえ、気付かれたか）

「で、どうなのよ？」

「な、な、なんでそんな風に思うんだよ？」

「いやーだつてさー」

その動揺に、休み時間の視線」

「そりゃ誰だつていきなり

んなこといわれたらだれも動揺するだろ？

それに視線ってなんだよ？」

視線は言うまでもない

頬杖付いて玲奈を見ている隆のものだろう。

「いやー休み時間よく一緒にいるけどさ

なんか隆らへんから妙な視線感じるんだよねー」

「そうかー、俺は知らんな」

「後確定的な証拠があるんだけどなー」

「な、何い？」

「どんなだ？」

「はい、その動揺」

「あーそうだとも。」

狩野さんが気になってるんだ」

…。

あっさり認めてしまった。

「まー頑張れよー。」

応援するからさー」

ある日の休み時間・昼休み

ある日の休み時間。

席が横。

その利点を利用しないわけにも行かない。

「…なあ、狩野さん」

「ん？何？」

「俺のこと知ってる？」

「知ってるってえー確か

斎藤君としか…」

「そっか。ならいいや」

「あ、後香奈と仲良いのも知ってる」

「あーあいつとは腐れ縁っつーか

そんな感じだな」

「そうなんだー」

「そうだと」

「じゃ、逆に聞くけどウチのことは

知ってる？」

「まー狩野 玲奈って名前のことしか

知らないや」

「ほら、お互いさま。

何も知らない同士よ」

「そうだなー、アハハ」

（ダメだ、俺。もっとアピールせんと）
キンコーンカンコーン。

ある日の昼休み

昼休み。

「玲奈！。」

「一緒にご飯食べよう」

「いいよー」

「でも隆が邪魔だなー」

「邪魔ってなんだよ」

「邪魔なんだもん」

＜隆ねえそこで俺も一緒に食べていいかって聞いて

そこで私がOKだして一緒に食べようっていう作戦よ＞

＜んな簡単にいくかいな？＞

＜いくじゃなくていかせるのよ＞

＜わかったよ＞

「そうかー邪魔かー」。

なら俺もそこに同席してもいいか？」

「いいけど」

香奈が言う。

「香奈がいいなら…」

そうして3人は一緒に昼食をとることになった。

そんなこんなで徐々に

玲奈と隆は友人になっていった。

玲奈の勘違い

そんなある日。

問題が起こった。

あまりに香奈と仲良くしすぎてるせいで。

よく2人でいることが多いせいで。

玲奈に勘違いされた。

「ねー斎藤君。

香奈と付き合ってるの？」

「……」

絶句だ。

他の人物ならまだしも

思いを寄せてる玲奈に。

「違うよ。

あいつとはただ腐れ縁っーみたいなもん」

「そっかー。

いやーさっき他の子と話しててその話題になって

ちよっと気になったんだよねー。

じゃ、ウチにも可能性はあると」

「狩野さんに可能性ねえ

さあね？」

（なんっー意味深な言葉ー）

体育祭

体育祭。

男子と女子が協力することが多い行事の一つだ。

隆はリレーだった。

タッタッタッタ。

ものすごい勢いだった。

それはそうだ。

一位で渡されたバトンを順位を下げるわけには行かないのだ。そして渡してきたのは玲奈だったのだ。

が、隆の全力疾走で1位もむなしくチームの結果は2位だった。

その帰り道。

「ドンマイ。

まーこんなこともあるよ」

玲奈から話し掛けてきた。

「まーそだな」

「でもウチの後の斎藤君の全力疾走はかつこよかったよ」

「いやーそかなー？」

まさか一位でバトン渡されるとは思わなくてもう必死だったよ。

狩野さんってホント足も速いねー」

「あーお疲れ様ー。

玲奈に隆ー」

香奈のお出迎えだ。

「玲奈の3位から1位はかつこよかったよー」

「そー？ありがとー」

「その後の隆の1位死守もなかなか

見ごたえあつたよー」

「そうかい？」

「後ろはどうだったの？」

「後ろは隆より少し遅いくらいだったね」

「でも、最終的には2位だったけどねー、残念だ」

「そうだな」

「でもまー2人ともお疲れ様」

文化祭の準備

文化祭。

隆のクラスはやる気がなく、
テキトーに歌を歌うことにした。

そうテキトーにだ。

のほろが、そうとなれば
力を入れたくなる担任であってしまった。
なぜか作詞作曲を生徒がするはめになった。

「あーパスパス。

めんどいしー」

という生徒が大半占めた。

「あ、ウチやってみたいかも…」

「お、じゃ、狩野頼めるか？」

「はい」

「あのーじゃ、私もやってみたいかも」
香奈がいった。

「なんかたのしそーだし俺も参加したいー」

「よし、じゃ、

狩野、平野、斎藤でたのむ」

「詩の方隆頼める？」

「へ…？」

「いや、マジやる気か？」

「当たり前よ」

「んじゃーやってみるよ」

「作曲はその詩で次第動き出すよー」
（要するに動く気はまったく
今はないということなんだな）

文化祭

一人自室で考え込む隆。
詩って言われてもなあ。

んなもん作ったことないしなあ。

恋愛詩？

友情詩？

ただの硬い詩？

あー

「人生それは…」なんかちがうな。

「好きだよと…」ってこれも明らかに違うよな。

「皆みんな生きてるんだ…」微妙に違うよな。

んだーもうわかんねえ。

「ということでした」

「えーと」

めぐりめぐる世界の中で

出会えた奇跡に感謝

皆に出会えたことへ感謝

ボクが道を失いそうなときに

いつも支えてくれたキミがいた

もし願いがかなうなら

キミに逢いたい

めぐりめぐる世界の中で

出会えた奇跡に感謝

皆に出会えたことへ感謝

キミが道を失いそうなときに
今度はボクがキミを支えたい
もし願いがかなうなら
キミは悲しまないで欲しい

めぐりめぐる世界の中で
出会えた奇跡に感謝
皆に出会えたことへ感謝

「って隆文化祭でなんでこんな
恋愛詩みたいなのなんよー？」
香奈が文句をつけた。

「しゃーねーだろ。」

「こんなんしか思いつかなかったんだから」

「いいかもー」

文化祭のテーマ

<出会い>だしー」

「そうかなー？」

頭をさすりながら隆が答えた。

「ねえ、香奈これでいいこう」

「玲奈。」

「そんなに気に入ったの？」

「うん」

「ここはこういうメロディーで
伴奏にんーなんだろ？」

「こんな感じでいけるんじゃない？」

香奈はもはや蚊帳の外で

一人玲奈が張り切って曲を作っている。

「狩野さんさ、なんか音楽やってたの？」

「んーピアノをちよつとね。」

あとベースとかもやったことはあるよ」

「うわ、すごい」

他の生徒も曲ができ出して

興味をそそられて徐々に参加しだしてきた。

一部の者で踊りをつけ

本格的になった。

そして文化祭当日。

なんとテキストにはじめてたはずの

隆のクラスが舞台発表の最優秀賞をとってしまった。

「いえい。これも隆の詩のおかげだね」

「いやいや、作曲した狩野さんのおかげだよ」

「そんなことないよ。」

これを作ったウチら3人のおかげだよ」

「そーかもね」

（3人つていつでも私何もしないけど…）

隆の心の動き

そんなこんなで
季節は秋。

それまでに体育祭やら文化祭で
学校が盛り上がったたのはいうまでもない。
その秋に移るまでに隆の中にも
ある心の動きがあったかもしれない。
さー学生の楽しみの一つである
修学旅行がくる。
カップル成立もよくある話だ。

「やー隆も同じ班だねー」

「あーそだな。」

お前とはなぜこつも毎回何かある度に

一緒になるんじゃ」

「アッハハハ。運命だつたりしてー」

「お前が運命の人なんざごめんだぜ」

…。

実は別に運命の人でもいいかもとか隆は思っていた。

そんな会話を苦そうに玲奈は見ていた。

「じゃ、ウチがうん…」

「ん、どうかした、狩野さん？」

「ううん、なんでもない。」

「いやー実はウチも同じ班なんだよ」

「え、マジで!？」

班割り表を見直した。

「おおー、マジだ」

「んもー。」

運命の香奈と同じ班で浮かれちゃってー」

「だからただの腐れ縁だって…、
多分…」

「あら？」

前はあんなに腐れ縁を強調してたのに、
今は多分？

運命の人が香奈なのもまんざらじゃなかったりしてー」

「…。

まあな」

「あらら。

認めちゃった。

ウチでよければ協力はするよ」

「ああ、そうか。ありがとうな」

（今実は距離を縮めたけど狩野さんよりも

腐れ縁みたいなのでいつもそばにいる

香奈のが気になってるなんて

香奈には言えんしな…、

香奈がそばにいてくれば

今はそれでいい。

俺が狩野さんのことを好きなままであるって
勘違いしても）

修学旅行

修学旅行当日。

班での自由行動。

玲奈が言う。

「あーこれ皆でのろー」

それは2人乗りの人力車であった。

「皆つて明らかこれ2人用だけど」

隆がツツコミを入れた。

<ちよい、アンタ香奈と2人乗りさせてあげようって

ウチの考え無視させる気？>

<いや、多分、

あいつは狩野さんと俺を2人にしようとするぞ>

<どういうこと？>

<俺は1年のときからこの夏まで狩野さんが気になってた>

<ハ？>

「おーい。

玲奈と隆ー。

早く乗りなよ。

私は木崎君と乗るからさー」

「あ、おう」

「ま、もういいわ。

とにかく乗るわよ。

さっきの話聞きたいし……」

そして隆は玲奈と香奈は木崎と乗ることになった。

人力車は町を西回りと東回りで

2種類あった。

2組はそれぞれ違う周りをまわった。

修学旅行2

玲奈と隆。

「で、アンタ。さっき言っただのはどういつこと？」

「さっきってのはどれくらいなもんかねー」

とにかく話をそらしたい隆。

「香奈が乗るっていう前の…」

なんかアンタがウチのことその「ゴニョゴニョ」…」

「あーもうこんな形でいうのは嫌だけど、

もうこーなったら全て言うよ」

1年のときにはじめてみてさ。

この子かわいいっておもってさ。

友達になれたらなとか

恋人になれたらなとかいろいろ考えてて。

「ちょっと待って」

「何？」

「1年のときはクラス違うかった…」

「うん、狩野さんさ、部活やってるじゃん」

「まあーもう辞めたけど」

「辞めたんか。」

なんかもつたないよ。

まーそのときにキラキラ輝いてるのみてさ。

他にも何回か木崎のところに遊びにいったときに

他の友達と楽しそうに話してる狩野さんのみてさ。

んでー2年になって、

クラス一緒になれたときはマジでうれしくてさ。

休み時間とかほとんど狩野さん見てて。

気がつけば考えてること全てに狩野さんが関連してきて

俺、恋とかしたことないから

よくわかんないけどさ。

多分こういうのが“好き”っていうだなんて思ったんよ」
そういつてるだけで半分以上は回った。

「そっか。」

じゃ、アンタとウチはすれ違ってたんだ」

「それはどういう…？」

「ウチは2年になってからだけどさ

アンタが好きだったんよ。

アンタの言うとおり考えることにほとんどがアンタでさ。

それは今も現在進行形なのさ」

「…。現在進行形…」

「…うん。」

こんなこと女子に言わせるんじゃないわよ」

「そっか」

「別に言ったからって付き合っただけとか

そういう意図はないから」

お客さんここで終わりですよ。

「あ、ありがとうございました」

その後の隆と玲奈の空気が
重かったのは言うまでもない。

香奈と木崎。

「んでさー」

「うん」

うんぬんかんぬん。

「そんなことよりもさー。

気が合うねえ」

「あーそれ私も思ったー」

「そっかー」。

「んじや、いつそ付き合っぢやうっ」
「あ、いいね。おもしろそう」

修学旅行3

ということで木崎君と付き合うことにしたから。

「ハ？」

玲奈も隆も驚いている。

おかげで少し2人の空気はましになった。

そんな香奈が隆にヒソヒソ話をはじめた。

<んで、そっちは何かあったの？>

<何かあったってこっちが聞きたいよ>

<んまー木崎君とは気があいそうだから>

<それでそっちは玲奈とどうだったの？>

<あーまー…

(まさか自分がこの前まで好きだったことを言った

なんて言えないしな)

普通に話してた>

<普通？なんか空気が重かったけど？>

<う…。気のせいじゃないか？>

<何かあったでしょ？>

<香奈には関係ねえよ>

(大ありだっつの)

「まーそういうことで後30分くらい自由行動残ってるから

2人で楽しんできてねー、玲奈と隆ー」

そう香奈は言い残し木崎とさっていった。

「どーするよ？」

「どーもしないわよ。」

「アンタこそどーするのよ？」

「どーしたらいいと思う？」

「アンタねえ、

腐れ縁だーっていつて

素直になれないからこんなことになったんじゃない。
自分で考えな」

「素直になればいいのか。」

とりあえず後30分どうする?。」

玲奈は時計を見る。

「後27分」

「細かいな、おい」

「テキストに2人で歩いとけばいいでしょ」

そう言つてテキストに2人で歩いていた。

嘘

修学旅行から戻ってきてから。
ある日の朝の教室の廊下の前。

「あー隆と玲奈ー」

なんだかんだいいつつ

2人は共にいることが増えた。

「私、木崎君と別れたから」

「ハイ？」

「いやーなんていうかー」

ほんのただの気の迷いって感じだなーって思って」

<よかったじゃない、斎藤君。

香奈がまたフリーに戻って>

<そうは言ってもなあ…。

あっちも腐れ縁って思ってたぞ。

意味ねえよ>

<そうかしらねえ？>

(…今ヒソヒソ話してるよね…)

「ん、なんか修学旅行の前後から

2人が妙に仲良かったり気まずかったりして

もしかして2人付き合ってるの？」

「そーだよ。

あれ？

言ってなかったけ？」

隆の肩に玲奈が手をおいて答えた。

<つておい、嘘つくな>

「そっか。

よかったね、隆」

そっいうと香奈はクラスに戻った。

願望？

「ほら、これでアンタも満足でしょ？

ウチの彼氏役できて」

「ハア？

勝手に話作ってんじゃないよ」

「作戦よ。

香奈が勘違いしてー

それでアンタに気が行くようにウチなりに考えたわけよ」

「んなで上手くいくもんなかね？」

「いくわよ。

というよりも

いくじゃなくていかせるのよ。

とりあえずなんでもいいから

休み時間とか席横なんだから

とにかくウチに話し掛けなさい。

それで彼氏面し続けなさい」

「あいよー」

（つーかそれただの狩野さんの願望じゃないのか？）

その後、香奈と隆が話す時間は

玲奈によって奪われていった。

「あ、た…」

「あ、そーだ狩野さんー」

（まるで私のことなんて見えてない…）

「ん、何？」

うんぬんかんぬん。

玲奈との距離が近づいたが

香奈との距離が徐々に離れていく。

素直に隆はそれが悔しかった。

隆の想い

「で、どう？」

玲奈が聞いてきた。

「どうって何が？」

「最近香奈と話しできなくて」

「こうやって狩野さんと友達になっていくのもいいけどさ、やっぱり香奈が恋しいというか香奈と話してるときが一番楽しいって改めて思った。」

これが恋愛感情ってやつなのかな？

やっぱり俺香奈が“好き”なのかな？」

「ほら、それがアంతの素直な気持ち。」

素直になって香奈にぶつかって来い」

「それは告れと？」

「素直になれってこと」

ウインクして玲奈は言った。

「ごめん、玲奈と隆」

「香奈!？」

2人同時に反応した。

「今の話聞いてた…」

隆の素直な気持ち

「隆は玲奈が好きじゃなかったの？」

「夏まではね。」

友達としてはいいけどなんか

恋人とかそういう風には考えにくそうな

友達になって…。

で、気がつけば香奈が

近くにいないくて寂しくて…。

で、多分これが恋愛感情の“好き”なんだなって思った。

素直に言っと香奈が好きだ」

「そっか」

「そうだったからって別に

付き合って欲しいとかそういう意図はない。

いままで通りでいたい。

これが俺の素直な気持ち」

「わかった。

実はいつくらいか忘れたけど

実は私も隆が気になってたの」

キンコーンカンコーン。

授業が始まる。

カリカリ。

告白

「ちょっと来なさい」

玲奈が隆を呼んだ。

「さっきのアンタ何？」

「さっきって授業中爆睡してて

イビキがうるさいとか？」

「そーだとしてもそんなことはどーでもいいのよ」

「んじゃ、なんだよ？」

「好きだけど別に付き合って欲しい

っていう意図はなしっていうことよ」

「それを言うなら狩野さんだって同じだろ」

墓穴を玲奈は掘ってしまった。

「ウチのことはいいの。」

アンタらは両想いなよ。

それじゃ、付き合うのが妥当なのよ」

「普通はそうかもしれないけどさ。」

俺はそうなんだよ。

付き合うとか恋らしいのは

もうちよい先のがいいと思ってるんだ」

「じゃ香奈はずっとこれから先もずっと

アンタを好きでいさせる自信でもあるわけ？」

「そんなのねえけどさ」

「じゃ、あれなしで付き合ってくれていいなさい」

「おかしいだろ」

「おかしくない」

「いや、おかしい」

「玲奈と隆ー」。

「この話も丸聞こえなんだけど」

話の主役の香奈が来た。

「じゃ、手っ取り早い。」

素直に付き合ってくれっていいなさい」

「だからおかしいって」

「玲奈…。」

2人の言うことどっちも正しいよ」

「両想いだったら普通付き合うもんね。」

でも、私“好き”だから

隆をいままで通りに見ることができないの。

最近どうしても異性としか見えないの。

だから私は付き合って欲しい。

もう元通りには戻れないよ。

一度壊れた私と隆の関係は戻せないの」

「俺は腐れ縁みたいなんでもいいから

そばにいて欲しい。

今は恋人としてじゃなくて友達として

んでいつかは恋人で

さらにその先は嫁としてそばにいて欲しい。

俺が香奈を絶対に幸せにするから」

「…」

「…」

「ありがとう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5546n/>

素直

2010年10月15日20時00分発行